
IS ラウラの兄は過保護な能面

ラウラの弟になりたかった

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS ラウラの兄は過保護な能面

【Nコード】

N1496BA

【作者名】

ラウラの弟になりたかった

【あらすじ】

俺の名はラウル・ボーデイヴィツヒ。ドイツのクソみてーな所で生まれた、とある天使のお兄ちゃんさ……。

この小説は作者が『ラウラに兄が居る話して見た事無くね?』という思いつきで突っ走って行きます。ラウラがほとんどラウラじゃなくなるので閲覧注意です。

プロローグ

俺の出生はクソみたいなものだ。ガラス管の中で発生して鉄の子宮に移され遺伝子操作やらなんやらを受けて生まれた。胎児には思考能力があるとかの実験で生後3日で言葉が話せるようになり、二週間後には歩けるようになった。そこから投薬と訓練漬けの日々。思い出していて思ったがアレは新薬の臨床実験もかねてたのかもしれない。

そんな俺がまともな容姿を得る事ができるはずも無く、まともな感覚もまともな考えも得られる事なんてある訳なかった。

簡単に言うと、俺は生まれながらの殺人者だった。殺す事が大好き過ぎてうっかり訓練で他の奴ら———— 勿論軍人———— をうっかり全員殺しちまったりとかしたが、貴重な実験体という事で処分は免れて来た。

薬品の所為か知らんが俺の髪の毛はその頃には既に真っ白、目玉は真っ赤になつていた。その頃はひよつとしたらストレスなんじゃ……とか思ってたが。

俺の脳味噌は必要以上に生存本能が強いらしい。その所為かは知らんが、俺は常にニコニコと笑っている人間になった。知ってるか、『笑い』って行為は元々威嚇のためにあるんだってよ。そのおかげで俺のあだ名は『笑う殺人鬼^{キラー・ラハン}』になつてた。

そんな俺にも妹ができた。妹と言っても、同じ研究所のたまたま同じ鉄の子宮から生まれたというだけで、血の繋がりなんざ1ミクロ

ンだって無かったが、俺はそいつを見た瞬間に『こいつだけは絶対に守る』という思いがこみ上げて来た。これが父性という奴だろうか？ そう研究所の俺の担当に聞いたら「それは君がそう設定されたからよ」と言われた。俺を造った事に関しては1ミリも感謝していないどころか憎んですらいたが、それを聞いて少しだけ感謝した。

妹も俺と同じように育った……訳ではなかった。性別が女だから、というのは多分関係ないだろうが、妹は普通の子どもと同じように育つらしい。これから随分可愛がってやろうと思っている。少なくとも、俺のようにはさせたくない。幸い俺は齡3歳にして既に伍長まで上り詰めている。それに、俺は貴重な実験体だ、上の連中は俺の言う事は大概聞くからな、妹は普通の子どもらしく育てさせたい

—— いや、無理か。あの鉄の子宮から生まれた以上は。が、せめて普通に——俺のようにではなく——育つ事が可能になるようにしよう。

俺の愛する妹—— ラウラ・ボーディヴィツヒのためには、俺——
—— ラウル・ボーディヴィツヒはどんな事だっしてやるさ。

その日、俺はいつものように妹であるラウラと散歩をしていた。ラウラは遺伝子操作や胎児状態での実験が施されていないのか、3歳児としては秀でているが俺のように人間止めている訳ではないので危なっかしい時もある。うっかり転びそうな時は俺が駆けつけて助ける——— と思ってたんだが、研究所の職員から『獅子は我が子を千尋の谷に突き落とす』という諺を聞いてあまり助けられないようにしている。痛みを知っていれば、その痛みから立ち直る方法も知る事ができる。特にそれが子どもの時であればそう、大人になって初めて転ぶと立ち直れないらしい、と聞いた。そんな事になったら大変だ。俺の命はいつまで保つか分かったもんじゃないし、いつでも

ラウラと一緒に訳にもいかない。今は育児休暇取ってるけど、ラウラが6歳になったら多分軍のキッズスクールに入れられるんだろうし。そのことを前にラウラに言ったら――

「わたしは、おにいちゃんというっ!!」

鼻血？ 違うよこれは愛が鼻から吹き出しただけさ。

閑話休題。

散歩から帰って来た俺は手を洗ってうがいをし（ラウラも一緒に）、食堂に向かった。俺は前までは汗臭い男子寮に入ってたんだが、ラウラと一緒に暮らすようになって女子寮に移った。で、男子と女子の待遇にビビった。

入った第一声が『部屋広っ!!』だったからな。男子寮は基本的に5人一部屋だ。それに比べて女子寮は二人で一部屋こうち。しかも一部屋が男子寮よりデカイ。ちょっとだけデカイ。その分天井は低いが、まだ6歳の俺と3歳のラウラには全く問題ない。

「おにいちゃん、はやくゴハンたべよ？」

「はいはいーい、ちょっと待っててラウラちゃん。今お兄ちゃん着替えてっからねー」

「あー、わたしもきがえるー」

「はいよー、それじゃバンザーイしてー」

「ばんざーい！」

よっこいしょっと。うーん、やっぱりいつも思うんだが、ラウラは可愛いよね。まさに純真無垢、汚れを知らない天使である。。
亜麻色の髪と綺麗なスカイブルーの目、整った顔立ちはもうラウラを目に入れても痛くない位だ。

「はい、お着替えしゅーりよー。ご飯食べにいこっか」

「うんっ！！」

そう言って俺の手を引っ張り元気に歩き出すラウラ。いつも通りスキップで鼻歌まで歌いつつ食堂に向かう。え、俺はどうしたって？

ラウラと一緒にスキップで食堂にGOさ。鼻血なんか出てないよ、これはラウラに対する愛だよ、愛。

今日もラウラが天使だった、まる。(前書き)

次こそは、次こそはラウラ隊長の口調もESも出すので、どうか今回だけはご勘弁を……！！

今日もラウラが天使だった、まる。

さて、そんなこんなで俺とラウラは食堂に入った訳だが、何分ここは大人用の食堂だ。いくら女性用——軍人の女つて普通の男より食うかもしれない——とはいえ、三歳児と大六歳児の胃袋には多すぎるんだ、量が。そこで（ラウラが）思いついた案が——

「おにいちゃん、あーん」

「はい、あーん。うーん、おいしいよラウラちゃん」

「えへへー、ありがとうー」

二人で一つのセットを食べれば良いじゃないか。という事だった。

確かに名案だが、俺の鼻血ダムが決壊寸前です。

が、そんなのんびりした風景がこの名物となっているらしい。目当ての4分の3はラウラであとは俺だとか。おかしい。明らかにおかしいだろう！ ラウラの純真無垢で可愛い笑顔を見たいと思うのは分かる。が、何故能面のようなのっぺりしたいいつも変わらない俺の顔まで見るのだろうか。はつきり言っただ俺は自分をわざわざ見たいとは思わない。いつもニコニコした6歳児なんて気持ち悪すぎる。しかも見た目が9歳児って……。ガキの3歳つて結構見た目に差が出てくるんだぜ。

気持ち悪い。いたらありゃしない。

「しちそーさまでしたー!!」

「よし、よく食べられたね。えらいえらい」

「えへへー、おにいちゃんはもうたべないの？」

「あー、うーん……そうだね、ごちそうさまでした」

「おにいちゃん」

「なんだいラウラちゃん？」

「えらい、えらい!」

「……(ツツー)」

「? おにいちゃんはなぜでてるよ?」

おつといけない。つい出てしまったようだ。

「じゃ、お兄ちゃんはちょっと用事あるからラウラちゃんはお部屋で待っててね?」

「はい!」

そう言って部屋に向かうラウラ。あーあー、そんなに走ったらこけるぞー……

コロソッ

「あつっ……いたくないもん。ラウラはもうおっきいからいたくないもん……」

タタタタタ……

いや違うんだって、これは鼻血とかじゃなくてラウラに萌えた俺の血潮がうっかり出てきただけなんだって。

で、さっさと用事を終わらした俺は部屋に帰っている途中。用事の内容？ あー……回想入りまーす。

「さて、実験体の新型の調子はどうかね？」

「ええ、まあ……。最初の実験体のガードが固いのでなかなか実験や投薬ができないんですよ。成長や身体能力自体は遺伝子強化されてある事もあって順当なんですけど……」

「そうか。ならばその旧型を他の所に飛ばせば、例えば日本の北部訓場にでも――」

「誰を飛ばすって？」

「っひい！？」

「な、だ、誰だ貴様はッ！？」

「おいおいおっさん、アンタ自分が話の話題にした人間の顔知らなかったのかよ!？」

「ま、まさか貴様が旧型ツ——!？」

「あつたり!。で？」

ラ ウ ラ に 何 を す る

っ て ?

「

—— ツツ!?!?!？」

「……」つ言っておくけど、ラウラに手え出したら、どうなるか分かんないよ? ……じゃ、お仕事頑張って下さいねー」

ま、ちょっと O H A N A S H I したら分かってくれたようだ。
何より何より。

そんな事より少し遅くなってしまった。ヤバイヤバイ、早く帰らないと(俺が)寂しくて死んでしまう。

「ただいまー、ラウラちゃん、帰って来……た……」

「くー……くー……」

今日もラウラが天使だった、まる。(後書き)

兄は基本的にはキララハンです。うそです。ラウラに手を出す人間にはもう容赦しません。

愛すべき、愛でるべき天使を守る為 前編（前書き）

今回は長くなりそうなので前後編に分けます。しかもオリキャラがまた出てきます。でもって今回と次回はラウラの出番が少なめになりそうです。みなさん、本当申し訳ありません……

愛すべき、愛でるべき天使を守る為 前編

あれから三年が経った。ラウラは軍のキッズスクールに入学、と同時に訓練も開始した。とはいえ元々の身体能力が高い上チートばりの伸びしろとそれまでに（俺が）教えて来た知識とかで同年代じゃトップの成績だそうだ。お兄ちゃんは鼻が高いよ。

ただ、訓練の教官の口調が移ったのかは知らんが昔より言葉遣いが少々男っぽくなってしまった。『おにいちゃん』と呼ばれなくなり『兄さん』になった日には枕を濡らした。

ああ、俺は正式に部隊配属となった。成績優秀者だからとか言ってたが、はつきり言って遣伝子レベルでいじってんだから成績優秀は普通じゃね？ とか思ったが気にしない事にした。

その日、俺とラウラは訓練も終わり、食堂で飯を食っている最中だった。

三年前と変わっていたのは、二人とも一人前の飯を食べるようになっていた位だ。俺としてはもっと『はい、あーん』がしていたかった……。

とか思ってた、その時だった。

『NOTFALL! NOTFALL!』

「ッ!!! 兄さん!」

「分かってるよ、ラウラちゃん!」

『緊急事態です、この基地のミサイルが何者かによってハッキングを受けています。基地内の隊員は速やかに退避して下さい。尚、特殊部隊隊員はそれぞれの持ち場に集合して下さい。繰り返します』

「じゃ、ラウラちゃん、また後でね」

「分かった。兄さんも気を付けて」

そう言って他の人に守られてシエルターに駆けて行くラウラちゃん。じゃ、俺も行きますか。ラウラちゃんを守るために。

「よう坊主、遅えじゃねえか！」

「悪いね、飯食ってたもんで。で、フツチー、今どんな感じ？」

「今はサイバー隊がハッキングを食い止めている所だ。が、それも精々時間稼ぎくらいにしかならないだろう。それとフツチーと呼ぶな、フリッツと呼べ」

「ってことは、俺等の出番が来るかもしれないって事か。しかも、今回は俺等だけで対処しろってことだよな、ヘルじい」

「ま、そう言うこつたな。ガハハハハハ！！」

「笑える状況ではないのだがな……」

持ち場に来たのは結局3人。つまり、ドイツ軍に取ってはここがそれだけ重要な基地だって事だ。

超特殊部隊、『ホムンクルス』。俺が所属するこの部隊は隊員全員

が投薬やらナノマシン注入やらで他の普通の奴らとは一線を画する、
言ってみれば化け物を集めた部隊。全員が一個中隊を殲滅できるレ
ベルの戦闘力を持つ。しかも全員が全員戦車でも戦闘機でも潜水艦
でももう何でも操縦できるという規格外な部隊。俺はその最年少
隊員にしてまさかのエース。ま、遺伝子からいじってる奴は俺しか
居ないから当然といえば当然かもしれない。

「……連絡だ、サイバー部隊がそろそろ陥落するらしい。せめてミ
サイルを落とせ、と言って来たがどうする？」

これは別に命令を聞くか聞かないかを聞いている訳じゃない。

「ウチってミサイル何本持ってるんだっけ？」

「150だな、確か」

「じゃ、丁度良いし一人50ずつってことでー」

「了解した」

「ハッハッハッ、さっさと終わらせて飲み行くぞフリッツ!!」

「貴方と飲みに行くのは遠慮したいんだがな、ヘルベルト……」

そう言つて全員パイロットスーツに着替える。今回一番楽なのは戦
闘機だし。

「じゃ、今日も元気に頑張りましたよー」

……

「え、無視？」

……

『続いてヘルベルト機、射出準備完了、発射タイミングをヘルベルト・バウムガルテンへ』

『了解じゃー！ ヘルベルト・バウムガルテン、出撃するわい！！』

「あーあー、聞こえますかお二方ー？」

『さっき確認しただろう』

『ま、そう言うなフリ坊。ラウルも心配なんじゃろ。なんせ、今は儂等のリーダーじゃからの！！ ハッハッハッハ！！』

「そーゆー事ー。じゃ、後30秒後にミサイルが発射されるらしいから、相対速度を合わせつつ迎撃でー」

『質問だが、ミサイルは何処をロックしているんだ？』

『おお、そう言えばそれを聞いておらんかったな。ラウル、儂等は一体何処まで行くつもりなんじゃ？』

「はーい、今回俺たちが さーい・あーく 行くのがー……」

「日本でーす！！」

『ちーちゃん、そろそろそっちにミサイルが行くから頑張っ
てね！』

「分かっている。私がやらないと……」

くっ、束の奴、私にこんな大変な事をさせるなど……。

だが、まあ良い。全日本剣道大会、女子一般の部優勝者の実力、見せてやるうじゃないか……！！

『警告、七時の方向より熱源接近。数三、距離300』

来たか。そう思ってISのハイパーセンサーで確認する。だが、数が3？ ミサイルにしては随分少ないような……まあ、最初はこんなもんか。

そう思って顔を向けて目視した先には、予想しなかった物が存在していた。

side out

さて、結局ミサイルはサクッと撃ち落とし、ついでにミサイルが狙った場所まで行け、なんていう指示が出されちゃって、今は日本

愛すべき、愛でるべき天使を守る為 前編（後書き）

やっと次でまともにISが出せる……！！

あ、それとこんな小説を読んで下さっている皆様に質問なのですが、ラウラが一夏を攻略するってありですかね？ できれば感想にでもチヨコチヨコツと書いて下されば作者が泣いて喜んで飛び跳ねます。

誤字脱字や文法的に間違っている所やその他指摘など、勿論感想もお待ちしております。

愛すべき、愛でるべき天使を守る為 後編（前書き）

今回もまたオリキャラが出て来てしまいます。一体何人オリキャラを増やせば気が済むんだ俺は……

愛すべき、愛でるべき天使を守る為 後編

前回までのあらすじ。

戦闘機で自軍の基地から発射されたミサイルを落としたりラウル一行はそのまま日本近空へ。だが、そこで今までの常識を覆す物を見る

……！！

「フツチー、そっちに七つ行ったよ！！」

『任せる。そしてフツチーではなくフリッツと呼ぶフリ坊！！』

そっちに三つ来るぞ！！ 氣い付ける！！』 ああ、クソ。なんで僕にだけこんな……任せる、ヘルベルト！！』

「今度はヘル爺に……17！？ 手伝おうか!？」

『なに、これくらい僕にやらせんかい。久々の空で大暴れしてやるわっ！！』

『ラウル、今度はそちらに13だ。それ位はこなせよ、エース?』

「ちょ、フツチー手伝ってくれないの!？」

あの『異常』なヒトガタを見た後、俺たちは取り敢えずミサイルを撃ち落とす事に専念し始めた。けど、これいくら何でも数が多すぎじゃね? そのうち燃料も切れるぞ。

『あーあー、状況報告するぞゴルア、聞こえてつか野郎どもゴルア』

『『「エーちゃん!!」(エドムント!!) (エド!!)』』』

『黙って聞いとけゴルア。現在日本に向かっていているミサイルはおよそ1500だゴルア。今まで800以上撃ち落としてたから、後3分の2だゴルア。で、ここからがお前等が知りたいと思われる所なんだが……ゴルア』

『あのヒトガタの事だろう?』

『当たり前だゴルア。今の所アレはお前等に攻撃はしてないからな、ほっとけゴルア。だが、狙われたら即帰ってこいゴルア。今んこの戦績を見てみるとアレとお前等三人がイーブンだゴルア』

「うえええええええ!?! あんなに強いのがあれ!?!」

『そのようだな。機動力は戦闘機と変わらんし、何より小回りが利く。お前等だつて見ただろ? アレがミサイルを叩つ斬っている所を』

ムムム……。あの白いヒトガタ。かなりやるな。俺等三人分と戦力が同じだなんて。

『ま、後は状況が大きく変わったら教えてやつから、全部落として帰ってこいゴルア』

『『「了解!!」』』』

「おい束！！ あの戦闘機も撃ち落とすのか！？」

『うーん、今の所はミサイルに集中してね！！ ……それが終わったら殺っちゃっていいよ』

「……分かった」

そう言っただけで通信を終えたと同時に私の左を通過しようとするミサイルを切り捨てる。いくら白騎士コイツが高性能だからって、ここまでの数をハッキングする必要は無いんじゃないか？

『あーあー、こちらドイツ軍超特殊部隊『ホムンクルス』。白いヒトガタ、聞こえてますかー』

何だ！？ 見れば、私とは少し離れてミサイルを撃ち落としていた戦闘機のうち一機から通信が入ったようだ。

『えー、聞こえてる物として通信続けますよー。こちらには貴殿を攻撃する意志はない。東側のミサイルは任せるので、西から来る奴は撃ちもらし以外は気にしないでー』

「なっ！！！」

……なんて自由な奴らなんだ。それに、東から来るミサイルの方が
多いのだが……。だが――

「やってやるさ、『ホムンクルス』」

――戦闘機如きに負けてたまるか……！！

side out

「ねえねえ、今の通信聞いてたー？」

『ああ。向こうも聞こえてたんだろう、先ほどからこちら側のミサ
イルは狙わなくなっている』

因みに今会話しているのは俺とフッチーだけ。ヘル爺はあの後『フ
オオオオオオオ！！！』とかなんかヤク中っぽい奇声を上げてバ
ンバンミサイルを落としている。多分、ナノマシンによる脳内麻薬
物質の増強でエライ事になってんだらうね。

「じゃ、こっちも頑張りましょうか。ヒトガタにも『こっちには任せ
る』とか言っちゃったし」

『そうだな。因みに、今の所墜機数が一番少ないのはお前だからな。
このまま帰ったら』エース（笑）『だぞ』
「それはイヤすぎるっ!!！」

『ラウル機、フリッツ機、ヘルベルト機。全機帰投を確認。これよ
り着陸行動に移行して下さい』

『『了解』』』

「やー、随分面倒だったねー、今回の任務^{シヨト}」
『結局燃料切れギリギリまで働かされたしな』
『……俺も燃料切れギリギリじゃ……』
「ヘル爺はナノマシン使ったからでしょ？」
『あの程度では使う必要もなかったと思うがな』
『お前等……年寄りをもっと敬わんかい……』
「敬う必要ないじゃん、ヘル爺は」
『そんな事なくても平気な位丈夫だからな、ヘルベルトは』
『……この糞餓鬼どもが……』

ま、ヘル爺虐めはこの位にしようか。そろそろラウラちゃんにも合

いたくなってきたし。

「いやー、実に12時間ぶりの地面ー!!」

「兄さんー!!」

「そしてラウラちゃん約12時間ぶ「おぼこっ!」?」

戦闘機を降りたと同時に駆けってくるラウラちゃん。そして迷わず俺の腹に頭突きを喰らわすラウラちゃん。油断してた事もあって、これはかなり効いた……。

「ら、ラウラちゃん? お兄ちゃんちょっとお腹が痛いかな……何て……」

「……うえぐ、ひつく……心配……したんだぞ……ぐずっ……う、うえええええええん!!」

「ちょ、ラウラちゃん!? 大丈夫だからね!? お兄ちゃんちゃんと生きてるからね!? もうピンピンしてるからね!?」

いきなり基地のマスコット(ラウラちゃん)に抱きつかれて泣かれる俺。どう見ても犯罪者です、本当にありがとう御座いました。

「……ひつく、ぐずっ……ほ、本当か……? ぐずっ、兄さん、居なくなつてない……?」

「大丈夫大丈夫、だからラウラちゃんもほら、泣き止んで」

主に俺の命のために。周りからの視線、というか殺気で殺されそうです。

」づづづっ、ひぐっ……おにいちゃああああああん!」

……いやこれは不意打ちに驚いた時の鼻血であって決してラウラち
ゃんに萌えたり

愛すべき、愛でるべき天使を守る為 後編（後書き）

前回ISが本格的に出ると言ったが、すまん、ありや嘘だ。

ちよ、止めてー。石は投げないでー、だからといって腐った卵も投げないでー。

取り敢えず本当申し訳ありませんでした。次……も厳しいかもしれ
ないけど、後3話先位には……必ず……！！

そしていつも同じオチ。たまには違うオチも書いてみたい物です。
そんな文章力が欲しい……。

しかも戦闘シーンほぼ飛ばしてしまっただ……。ち、違うんだよ！？
たまたま調子が悪かっただけで普段なry

……やべえ。この回というか全編にわたって反省しかねえ。しかも
その反省を行かせてねえ……。

つ、次こそは、次こそは必ず……！！ と、失敗フラグを立ててみ
る

あ、それと感想の方でチヨロっと言っていたアンケートの事ですが、

今取っちゃおうと思います。

一応ラウルくんのお相手の事ですが、

1、相手なんか居ない

2、一夏くん

3、その他の誰か（五反田弾）

でお願いします。嘘です。本当は次かその次辺りに取ってみようと思います。

ちなみに、今回のアンケートで、一番多かった意見でifストーリー
Iでも（暇潰しに）書いてみようかなと思ってます。120%ネ
タにしか走りませんが。

天国と地獄への異動（前書き）

今回もISが出てきません。いい加減本編行きたいよ……

件があつて、世界中がインフィニットストラトス——通称IS
——を軍事利用としている。ま、確かにあんだけ強いんじゃ宇宙開発なんてやってらんないわ、って事だろう。

が、ISには兵器としては致命的な欠陥があつた。

まず一つ目、ISの核である、というかコレがなければISが成り立たないという『コア』というパーツは、ISの発表者にして開発者、篠ノ之の束……間違えた、篠の束……また間違えた。名前がややこしいんだよ！！　なんで名字に『の』が三回以上付くんだよ！！　とにかく、その篠ノ之束博士しか作れず、現在コアは467個しかない。つまり、世界中に割り当てられたコアを使って戦争でもしろ、みたいな事だろうか。面倒くせ。

二つ目の欠陥。……個人的には認めたくないんだが、ISは女性にしか起動できない。正確に言うとISのコアは女性にしか反応しない。女性の軍人も居るには居るが、大体が衛生兵や楽器隊、後援隊など戦闘向きの訓練はしていない。ま、体力は勿論ガッツリあるから、一般人よりはマシなんだろうが。

……だが、冒頭部分の俺と隊長の会話を思い出してほしい。何故俺がIS操縦者のみの部隊に行くのか。……まあ簡単な話だけど。

動かせちゃつたのだ、ISを。男の俺が。

コレには一応訳がある。本当に女しか起動できないのかと世界各国のお偉方は疑つた。当たり前前だけど。俺だつて疑う。で、疑つた結果がコレだ。

『男にコア触らせればいくね？』

ノリが軽いのは俺の言葉だから、な。

で、その結果男には全く反応しなかった訳だが、何故か俺の時だけ動いたのだ。まあ、遺伝子からいじってるから誤作動だろうと思っ
て二三回ほど触れたら――

『ねー、コレいつまで触ってればいいの?』

『……もうちよつと触っててくれ、今起動時のコアのエネルギー回路を調べている所だ』

『ふーん……。にしてもコレがあの手兵器の元だとは……。手のひらサイズって、なんかこれちよつとした宝石だよね』

『配付されたコアではそれだけが小さかったな』

『……それ、外れくじじゃね?』

『そんな事は知らん。というか、ドイツ軍にはお前等^{ウチ}がいるからな』

『あー、なーるへs……!! あああああアアアアアアああアアああああア!!!』

『!? なんだ、一体どうなってるんだ!? ……ISのコアが体内に!?!』

『ごっ、ガアアアああああアアアああああ!!』

『いや、お前結構余裕だろ今』

てなわけで、入り込んだりしたたのである。ISのコアが、俺の体に。しかも、何故か取り出せなくなってしまうたのである。……これ、ひよっとして詰んだ？

「第五ブリーフィングルーム、はどっこっかつなつと。……お、ここか、お邪魔しまーす」

……やめて、そんな『なんでお前がいんの？』見たいな視線はやめて。死んじやいそくだよ俺。

というか、俺の事は軍の中で噂になってないのだろうか。この視線から察するに、相当嚴重な箝口令が敷かれているみたいだ。

「失礼します、空軍第3小隊より参りました、クラリッサ・ハルフ オーフです」

「陸軍より参りました、ラウラボードヴィツヒで———「ラーウラーちゃん———」———「フンツ———」
「ウボア———」

K.O.

PERFECT!!

「……私の愚兄が失礼しました」

く、ラウラちゃん腕を上げたね。まさかの確に、何の躊躇も無く俺の顎を打ち抜くなんて。正直お兄ちゃんもう泣きそうだよ。

PIPIPIPI!!

ラウラに拒絶された事で心が痛かった俺とそんな俺を遠巻きに眺めていたこの部屋の全員の至る所から軽い電子音がする。

音の正体は軍用携帯端末から発せられたもの。この端末はすげーぞ。ドイツ軍独自の軍事衛星で通信してるから地球上何処にいても電波届くし、通信時に自動で量子暗号掛けられるから盗聴やデータ見られるような事もない。それに骨伝導機能が付いているから体に触れていればちゃんと通信時に声が聞こえる。しかもとんでもなく丈夫だ。マグナム弾零距离でぶっ放されて液晶に傷ひとつ付かないってどうなの？

俺がここまでその端末に詳しいのには訳がある。なぜならその端末は我ら『ホムンクルス』によって生み出されたドイツ軍の地味な誇りだからだ。

閑話休題。

みんな早速端末を開く。俺は体内のナノマシンと同調させて情報を直接頭に流しこむ。……なるほど、なるほど。つまりこういう事だな。

『シュヴァルツェ・ハーゼの隊長はクラリツサで。副隊長はラウルくんでシクヨロツ!!』

まじか。まあともかく、

「じゃ、全員座って座ってー。俺も何がなんだかよく分かんないけど、一応顔合わせという事で自己紹介でもするのでとにかく座ってー」

その言葉で適当に座ってくれる皆さん。うんうん、規律を守れるって素晴らしいよね。

「じゃ、自己紹介から行きましょうか。多分知ってると思うけど、ラウル・ボーデヴィツヒ。階級は小尉です。じゃ、お次はクラリツサさん、どうぞー」

「クラリツサ・ハルフォーフです。階級はボーデヴィツヒ副隊長と同じ少尉、みなさん、よろしくお願いします」

そんなこんなで自己紹介は続いた。そしてついに――

「ら、ラウラ・ボーデヴィツヒです。階級は兵長です。よろしくお願ひしました――――します……／＼／」

か、か……

() () (噛んで、照れた……だと……?) ()

ブシャアッ!! ブツシャア!!

「な、え、ちょ、あの、皆さん大丈夫ですか!?!」

ラウラちゃんの緊張した姿に(+ 噛んで照れた姿に) 萌えた隊員達

は一斉に鼻血を吹き出す。俺？ 舐めてもらっては困るよ。これでも幼い頃からラウラちゃんに萌えて来たんだ。今更これしきの事で鼻血なぞ出すものか——！！

「あ、あうう……お兄ちゃん……」(ラウルの袖をギュツと掴む)

K・O・！！

PERFECT！！

本日の死傷者、『シユバルツェ・ハーゼ』隊員全11名中10名。原因、同隊のラウラ・ボーデヴィツヒ隊員に萌え、鼻から多量の血液を流出し、貧血による失神。全員が恍惚とした表情を浮かべており、医療班はこの不可思議な現象に頭を抱える——と思われたが、室内にいたラウラ隊員を見て納得した。

天国と地獄への異動（後書き）

誤字脱字や文法ミスなど、ご指摘受け付けております。

また、作者は構ってちゃんです。感想が来ると泣いて喜びます。ついでに受験勉強ほっぽって書きに来ます。どうか、生暖かい感想をよろしく願います。

あ、それとアンケート実施します。この後のラウルくんのヒロインですが、篠ノ之箒及び凰鈴音さんは除外させて頂きます。それ以外のキャラクターので投票お願いします。応募が多数きた場合は、表の多かった人一人が、作者が頑張ればもうあと一人か二人がヒロインとなります。もちろん、『ヒロインなんかいらねえぜ！』って言う意見でも構いません。

正直に申し上げますが、作者にラブコメを上手く書く自信が御座いません。下手なカップリング描写を見せつけられるよりは、このままヒロインなしでもいいかな、とか作者は思っています。

皆様の欲望にまみれ、ゲフンゴフンッ！……清き一票をお待ちしております。

これで感想が増えたらいいなあ、とかいつてみたり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1496ba/>

IS ラウラの兄は過保護な能面

2012年1月11日01時51分発行